

# 四・オールドノリタケの名古屋城

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

城コレクションをしていると、骨董市で多くの陶磁器に出会う。基本、陶磁器のコレクションは割れるから避けている。これまで何枚の皿を粉碎したことか。天保の地図皿、清州城修築絵柄小皿、ほんのわずかの不注意でガチャンという不気味な音、骨董市会場でも必ず聞くことになる。それでも修復して保存している。生者必滅、形あるものは壊れるが、懲りずに城があれば集めている、東海道浜松宿の浜松城が描かれた大皿、金鯨の象嵌小皿、高知城の大皿、大坂城西外堀の小皿、姫路城まがいの大皿、中皿、大坂城天守、名古屋城天守、犬山城天守、彦根城天守等3D酒ボトル数十個、錦絵姫路城天守築城図酒瓶、江戸城三重櫓皿という具合である。地震が来たら、恐ろしい。

その中にオールドノリタケの城作品がいくつか含まれている。殆どは名古屋城天守、まれに日本ライン犬山城がある。オールドノリタケは明治初期の貿易商社森村組が苦闘の末開発した白生地を元に、明治37年(1904年)日本陶器合名会社を設立した。現在の名古屋市西区則武新町の誕生、地名から商標とされた。その技術は食器以外にも活用され、衛生陶器のTOTO、碍子の日本ガイシ等世界最大のセラミック集団を形成しているという。

ノリタケ作品には多くの技法が知られているが、ここに紹介するのは名古屋城天守周辺が描かれた肉筆2点である。1枚は「昭和7年(1932年)第3師団秋季演習記念 日本

陶器会社」と裏印がある。第3師団は明治21年(1888年)名古屋鎮台から改組され、師団司令部は名古屋城におかれていた。皿は直径21cm、深さ5cmの中深皿である。絵柄は名古屋城大手門から入り天守方向を眺めている。特長はエナメル調の輝かしいばかりの光沢にある。まさに絶品の美しさを放っている。えんじ色の台に金縁、黒の荘重な木製の額縁に囲まれている。額は36×41cmであるが、燦然と輝き、あたりを睥睨している。あと1枚は直径31cmの大皿である。こちらは名古屋城西城外から、西丸、御深井丸の石垣を前に、御深井丸越に天守が描かれている。こちらにも「日本陶器会社」と裏印があり、金泥に塗られた木枠に囲まれ、39cm角の額縁に収まっている。いずれも、絵付けされた作家名はないが非常に忠実に写實的に描かれている。

名古屋城天守は昭和20年(1945年)5月14日、アメリカ軍機による焼夷弾で本丸御殿ともに焼失した。しかし、天守に燦然とか輝いていた金鯨への思いを含めて、昭和34年(1959年)市制70年事業として再建され、現在本丸御殿も再建中である。名古屋城と言えば金鯨、城内売店には多くの金鯨グッズが販売され、時には金鯨展が開催される。富原文庫も多くの金鯨コレクションを収蔵している。木製屋台飾りのような金鯨、用途不明の金属製金鯨、陶器製金鯨、名古屋市庁舎竣工記念金鯨、名古屋城ではないが大坂

城復興の際、使用された銅でつくられた金鯨、多くの錦絵に描かれた金鯨等々である。徳川幕府による天下普請名古屋城、名古屋築城人足における藤堂高虎の居城津からの石引き歌、「石は津で持つ、津で持つ石は、尾張名古屋の城で待つ」が転じて、「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ」という意味不明の伝承となった。天守台を担当した加藤清正由来の石垣刻印も50年前に拓本をとり、所蔵している。金鯨だけでなく、床面積では江戸城、大坂城を凌ぎ、姫路城天守の倍、日本最大の天守であった。



オールドノリタケ大皿名古屋城  
西外堀より天守



オールドノリタケ名古屋城  
大手門側より